様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６２０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５４６３３５８

研究課題名（和文）日本における近代看護の定着過程に関する歴史的検証

研究課題名（英文）A historical investigation into the establishment of modern nursing in Japan

研究代表者
樋野　恵子（HINO, Keiko）

順天堂大学・医療看護学部・助教

研究者番号：３０５５０８９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　現代では看護の対象を生活者として捉え、病院看護と家庭看護の連携が求められている。本研究は日本の医療史の中に病院看護と家庭看護の源流を探ることを目的とする。
　1874年、医学雑誌の付録として掲載された『看病心得草』は、わが国最初の近代翻訳看護書とされている。入手した原著との比較を行った。翻訳書は原著に忠実かつ平易な表現で翻訳され、医師だけでなく一般の女性に対しても理解を促すための工夫がみられた。また、1832年出版の近世看護書との比較を行った。漢方医による往診が行われていた江戸後期には、既に看護の必要性の認識があり、その後の近代看護の受容・発展の一要素となっていたことが考えられた。

研究成果の概要（英文）：Kanbyo Kokoroegusa was featured as a supplement to a medical journal in 1874, was the first translated, modern nursing text in Japan. The present study compared this translation with a copy of the 1852 source text. The translation was rendered in simple expressions faithful to the source text and shows that efforts were made to promote understanding, not only amongst doctors, but also within a general female audience. The study also made comparisons with Byoka Suchi, an early-modern nursing text published in 1832, and examined the significance of nursing texts in the establishment of modern nursing practices. Results indicate that there was already an awareness of the need for specialist nursing in the late Edo period, when traditional kampo medicine was being practiced in homes, and that this became a factor in the later adoption and development of modern, Western-style nursing.

研究分野：看護学

キーワード：看護教育史　近代看護　翻訳書　病院看護　家庭看護　定着過程

１．研究開始当初の背景

西洋医学が移植されるまでの間、日本の医療形態は医師の往診を基本とし、患者の看護は家族によって自宅で行われていた。明治期に入り、西洋式病院の普及とともに病院看護が専門領域として認識されるようになったが、一方では近代学校制度の導入、欧米文化の流入によって開始された家政教育の中に、女性のたしなみとしての看護法が導入され、別の流れを作り出していった。わが国では有志共立東京病院において、明治 18（1885）年より近代看護教育が開始されたが、それ以前にすでに病院看護、家庭看護のそれぞれを対象とした翻訳書が存在することが基礎調査により明らかとなった。先行研究として、まず、病院看護者を読者対象とした明治 10（1877）年出版『看護心得』の原著解明と内容の比較検討を行った。次に、家庭看護者を対象とした明治 7（1874）年出版の『醫師の来る迄』の原著との比較検討を行った。さらに、平成 23~24 年度科学研究費の助成を受け、明治初期に初等教育の教科書として採用され、広く普及した翻訳解剖・生理・衛生学書である『初学人身窮理』の一部に看護に関する章が存在することに注目し、調査した。その結果、翻訳病院看護書『看護心得』と翻訳家庭看護書『醫師の来る迄』では、看護者として男性を想定していたことに対し、『初学人身窮理』では看護を女性に適した技能としていたところに特徴があった。また、明治初期の有識者が目指す看護は病院と家庭それぞれに特徴があるが、どの書も極めて実学的な内容であることが明らかとなった。

２．研究の目的

現代では看護の対象を生活者として捉え、病院看護と家庭看護の連携が求められている。本研究は、日本の医療史の中に病院看護と家庭看護の源流を探ることを目的とする。

系統的な近代看護教育が開始される明治 18 年以前に出版された、病院看護、家庭看護をそれぞれ主題とする翻訳看護書の原著・翻訳書間の比較検討を行い、日本における近代看護の定着過程の歴史的特徴を明らかにする。本研究で取り上げる一次史料『看病心得草』は 1874（明治 7）年に医学雑誌の付録として、翌年には単行本として出版された、現時点ではわが国で最初の近代翻訳看護書とされる。原著は先行研究で扱った初等教科書『初学人身窮理』と同じ米国人医師 Calvin Cutter の著作である。本研究では、書誌学的調査を実施し出版状況を把握するとともに、原著と翻訳書との比較検討を行い、翻訳の特徴を分析する。さらに、翻訳書・原著を時代背景の中に位置づけ、明治初期の日本における近代看護の移入と分化の歴史的過程の一端を明らかにする。

『看病心得草』は、現存数が少なく入手困難なこともあり、これまでこの書を主題とした詳細な研究はほとんどなされていない。明治初期における看護書の翻訳作業は、翻訳者による意識的・無意識的な試行錯誤と工夫を必要としたことが予測され、当時の医療者の医療観・看護観や専門的知識の状況が反映される可能性が高い。本研究は、看護学領域において研究の蓄積が乏しい原著・翻訳書研究に着目し、比較検討を通して近代日本における看護の移入・分化過程を明らかにする、看護学史的に意義のあるものと考える。

３．研究の方法

１）研究史料の収集

（１）収集する一次史料

田代基徳閲・岡田宗訳『看病心得草』、Calvin Cutter, “A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene”、Calvin Cutter “First Book on Analytic Anatomy, Physiology, and Hygiene”

（２）収集する二次文献

平野重誠原著・小曽戸洋監修『病家須知』翻刻訳注篇・研究資料篇 2006（平成 18）年

２）明治期における『看病心得草』の出版・普及状況の調査と翻訳書に対応する原著の書誌情報の明確化

日本における『看病心得草』の出版状況、普及状況を分析するため、調査を行う。また、原著者の Calvin Cutter は同種の啓蒙書を多数出版しており、これらは 1840 年代以降、版を重ねている。翻訳書『看病心得草』と対応する原著の書誌情報を調査する。

３）原著・翻訳書間の詳細な比較と翻訳の特徴の分析

原著の翻訳作業を経て、翻訳書『看病心得草』との内容の比較を行い、翻訳の特徴を検討する。また、刊行主旨と読者対象を分析し、時代背景の中に位置づけることにより、翻訳者の意図を考察する。

４）周辺領域の調査と分析・比較検討

江戸後期に出版された養生書にある日本古来の看護法についての調査を行い、『看病心得草』と比較する。以上をふまえ、近代看護の定着過程におけるこれらの看護書の意義を検討する。

４．研究成果

１）研究史料の収集

本研究で使用した史料は以下の通りである。

①田代基徳纂輯「文園雑誌」第 5 冊、1874（明治 7）年

②田代基徳閲・岡田宗訳『看病心得草』1875（明治 8）年

③Calvin Cutter, “A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene” 1852 年

④Calvin Cutter, “First Book on Analytic Anatomy, Physiology, and Hygiene”1852 年
⑤平野重誠原著・小曽戸洋監修『病家須知』翻刻訳注篇・研究資料篇 2006（平成 18）年（元本 1832（天保 3）年）

２）明治期における『看病心得草』の出版・普及状況の調査と翻訳書に対応する原著の書誌情報の明確化

本研究の主題である『看病心得草』は、現時点ではわが国最初の翻訳看護書とされる。医学雑誌の付録として発行され、翌年には単行本として出版された。翻訳に携わった田代基徳は、緒方洪庵の塾生である。

『看病心得草』の原著を特定すべく、“First Book on Analytic Anatomy, Physiology, and Hygiene”、“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene”の 3 書の記述内容を比較した。“First Book on Analytic Anatomy, Physiology, and Hygiene”と“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene”にはどちらも‘Directions for Nurses’の章があり、その内容はわずかな単語の相違を除き一致していた。しかし、“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene”にのみ記述されている段落が 2 か所あり、『看病心得草』にはその部分が翻訳されていた。このことより、『看病心得草』の原著は米国人医師 Calvin Cutter“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene”であることがわかった。この原著は小林義直訳『カットル氏生理養生論』（明治 14 年）としても出版されていることがわかっている。『看病心得草』はこの原著の最後の章‘Directions for Nurses’を翻訳したものであった。

なお、明治 15 年ごろの英蘭堂の發兌目録には、『看病心得草』の定価として 6 銭 2 厘 5 毛と掲載されている。ちなみに先行研究で扱った楢林健三郎訳『醫師の来る迄』は 55 銭であることが、同じページに記載されていた。

３）原著・翻訳書間の詳細な比較と翻訳の特徴

入手した『看病心得草』とその原著“A Treatise on Anatomy, Physiology, and Hygiene”(1852 年版)の第 49 章 Directions for Nurses’との比較を行った。『看病心得草』は当初、医学雑誌の付録として出版されたため、直接の読者対象は医師であることが考えられるが、看護は女性に適した技能であり、看護学校がないことを補うために記述するとした原著の内容を、忠実に翻訳していた。また、翻訳は婦女子にも理解できるように、変体仮名まじりかつ平易な言葉で記述され、日本文化に合わせて表現を工夫していた。これは同時期に翻訳出版された他の看護書と共通していた。『看病心得草』の刊行主旨に関しては、田代による題辞に、誰でもいつ病に罹患するかわからない、そのような時に看護法が適切でなければ、名医妙薬で対応しても効果が乏しくなるため、看病心得草を出版するとしていた。

以上をふまえて、これまでの研究で検討した明治初期に出版された翻訳看護書の特徴をまとめた（表 1）。

表１　明治初期出版の翻訳看護書の特徴

	医学雑誌付録『看病心得草』明治 7 年	初等教科書『初学人身窮理』明治 6 年	家庭看護書『醫師の来る迄』明治 7 年	病院看護書『看護心得』明治 10 年
読者対象	医師（本文では主に一般女性）	初等教育を受ける幼童（本文では主に一般女性）	国民一般、特に一家の主人：男性	病院で看護を担う看病人：男性
刊行目的	看護法の要点を提示することで、医療の質の向上を目指す	女性の心得としての看病法の提示、看病人教育の停滞を初等教育で補うため	医師到着までに実施する救急法・処置に関する情報提供、家庭での早期発見・対処の重要性の強調	病室の管理に関する情報提供、看護領域の重要性の強調
翻訳の特徴	忠実かつ平易な表現	忠実かつ簡潔な表現	段落ごとの要約	取捨選択と補足
翻訳者の意図	医師だけでなく一般女性へも啓蒙	基礎知識としての西洋医学の享受	一般国民の教養の拡大・向上	医療の質の向上

４）周辺領域の調査と分析・比較検討

江戸後期に出版された、日本古来の看護法をまとめた最初の書とされる平野重誠著『病家須知』（1832 年）と、本研究の主題である近代最初の翻訳看護書『看病心得草』（1874 年）との比較を行い、近代看護の定着過程におけるこれらの看護書の意義を検討した。

江戸後期に出版された『病家須知』の特徴は以下の通りであった。執筆者である平野重誠は町医（漢方医）であり、読者対象は一家の主人としていた。また、当時の識字率の低さを鑑み、出版の意図として、読み聞かせにより内容を伝えていくことも想定されていた。そのため、世間一般の民衆の生活の中での看護の様子がイメージしやすいように、水音を聞かせることで患者の入眠を促す方法や包帯法など、挿絵が多用されていた。記述

されていた内容は、江戸後期の文化に基づいてアレンジされた漢方医学や、在宅医療から生じた看護法であった。従来の自己の健康維持のための方法が書かれたものとは違い、他者への援助のための養生法・看護法として、意識的に技術化し、工夫して記述されていた。

一方、明治初期に翻訳出版された『看病心得草』は、蘭方医であった田代基徳らにより翻訳・校閲され、原著は 1850 年代のアメリカでベストセラーとなった解剖生理衛生学書の一部であった。医療の成功には医術、良薬と合わせて適切な看護が不可欠であるとし、読者対象である婦女子に向けて女性の教養としての看護法を享受する目的で翻訳編集されていた。その内容は、西洋式の具体的な看護手順と留意点を、一部日本文化に沿うようアレンジしながら簡潔に記述されていた。現代にも共通する内容がほとんどであったが、例えば伝染病患者の看護には、白い服よりも黒い服の方が、病人から出る気を吸収できること等、科学的根拠が見いだせない部分もあった。

これらをふまえ、近代看護の定着過程における 2 書籍の意義を検討した。漢方医による往診が行われていた江戸後期には、すでに医療者・有識者の中に専門的看護の必要性の認識がうかがえた。このような背景が、幕末から明治にかけての大転換期に移入された近代看護を受容しやすくし、その後の定着・発展の一要素となったのではないかと考えた。また、2 書籍とも非常に実践的な内容を平易な表現で著しており、看護に必要な知識を普及させることで、日本の医療全体の質の向上を図り、国民生活の利益に結び付けたいという、近世から近代へと時代的な流れはあれども医療者や有識者の共通する思いが存在していることがわかった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 1 件）

樋野恵子：近代看護の定着過程に関する史的考察－江戸後期看護書と近代翻訳看護書との比較を通して－、第 9 回医療看護研究会、2015 年 3 月 8 日、順天堂大学浦安キャンパス(千葉・浦安)

６．研究組織

(1)研究代表者

樋野　恵子（ HINO, Keiko ）
順天堂大学・医療看護学部・助教
研究者番号：30550892